

生誕100年 名匠ヴォルフガング・サヴァリッシュ

プログラム

今年は、わが国でもN響の名誉指揮者として馴染みの深い名匠ヴォルフガング・サヴァリッシュの生誕100年に当たります。そこで今日はサヴァリッシュが残した選りすぐりの名演奏でお楽しみください。ヴォルフガング・サヴァリッシュは1923年8月26日、ドイツのミュンヘンで生まれました。ミュンヘンの音楽院で学び、幼少期からピアノの才能を発揮、1949年のジュネーヴ国際音楽コンクールではピアニストとしてヴァイオリンとのデュオ部門で1位なしの2位になる程の腕前でした。フンパーディンクの歌劇「ヘンゼルとグレーテル」を見て感動、指揮者を志し、ハンス・ロスバウトに師事しました。1947年、このオペラでアウグスブルク市立劇場で指揮デビュー。1953年アーヘン市立劇場の音楽総監督、1957年には34歳という若さでバイロイト音楽祭に初登場。1958年には「プラハの春」でチェコ・フィルと初共演。1960年～1970年ウィーン交響楽団首席指揮者。1961年～1973年ハンブルク・フィル首席指揮者。1970年～1980年スイス・ロマンド管弦楽団首席指揮者。1971年～1992年バイエルン国立歌劇場音楽総監督。1993年～2003年フィラデルフィア管弦楽団音楽監督などを歴任しました。わが国には1964年NHK交響楽団を指揮して初来日、以降毎年のように来日し、1967年名誉指揮者、1994年には桂冠名誉指揮者となりました。2006年3月、心臓病の悪化を理由に現役を引退、2013年2月22日バイエルンの自宅で89年の生涯を閉じました。強固な土台を築き、そこに様々な要素を使って音楽を組み立てて行くようなサヴァリッシュの指揮は、端正なバランスの良さと重厚な音楽表現を持ち合わせていました。(中川)

フェルティナンド・エロルド (1791~1833):

歌劇“サンパ”序曲

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮NHK交響楽団
(1988.5.1 サントリーホールでのLive)

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750)~ストコフスキー編曲:

トッカータとフーガニ短調BWV.565

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮フィラデルフィア管弦楽団
(1999.5.14 横浜みなとみらいホールでのLive)

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト (1756~1791):

交響曲第41番ハ長調K.551“ジュピター”

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1997.3.13 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949):

あすの朝 (“4つの歌” Op.27の4) / 愛の賛歌 (“5つの歌” Op.32の3)

ヘルベルト・リツペルト (tener)
ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮NHK交響楽団
(1995.10.11 NHKホールでのLive)

ニコライ・リムスキー=コルサコフ (1844~1908)

スペイン奇想曲Op.34

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮NHK交響楽団
(1988.5.1 サントリーホールでのLive)

フェリックス・メンデルスゾーン (1809~1847):

交響曲第5番ニ長調Op.107“宗教改革”

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮ウィーン交響楽団
(1993.2.19 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

曲目解説

エロルド：歌劇“ザンパ”序曲

ルイ・ジョゼフ・フェルディナン・エロルド（エロール）は1791年パリで生まれたフランスの作曲家で、祖父にピアノの手ほどきを受け、1806年パリ音楽院に入学しピアノと作曲を学び、1812年にローマ大賞を獲得しました。生涯数曲のオペラ、多くのピアノ曲と交響曲、室内楽作品などがありますが、今日知られているのは1831年に作曲された歌劇「サンパ」のみで、しかも上演されることはほとんど無く、序曲のみが良く知られています。海賊サンパが商人の娘と強引に結婚しようとするも、以前の恋人に殺されるという物語で、序曲は軽快なリズムと親しみやすいメロディを持ち、その後半部が1972年から1985年まで続いたNHK-FMの音楽番組「朝の名曲」のテーマ音楽に使われました。

バッハ：トッカータとフーガニ短調BWV.565（ストコフスキー編曲）

1702年に高等学校を卒業したバッハはすぐに自活する必要に迫られ、1703年3月に18歳でアルンシュタットの教会オルガニストに採用されます。1708年7月にワイマールの宮廷礼拝堂のオルガニストになると名声は高まり、若き大家と呼ばれるようになります。トッカータとフーガニ短調は1702年から1709年頃の間作曲されたのではないかとされています。強烈な個性が支配し、冒頭のラブソングなトッカータ、主題が次々と自由に展開して行くフーガ、そしてそのフーガが冒頭のように即興的に盛り上がり、コーダを迎えるという3つの部分から構成されています。激しい感情の起伏を持った若きバッハの代表作ですが、多くの編曲が生まれ、大指揮者レオポルド・ストコフスキー（1882～1977）による管弦楽版は特に知られています。オルガニスト出身のストコフスキーはバッハの多くのオルガン曲をオーケストラ用に編曲、トッカータとフーガはストコフスキー指揮フィラデルフィア管の演奏が1940年のディズニー映画「ファンタジア」で使用されたことで一層有名になりました。

モーツァルト：交響曲第41番ハ長調K.551 “ジュピター”

モーツァルトの最後の交響曲となった第41番「ジュピター」は1788年8月10日に完成しました。実はこの年には第39番が6月26日、第40番が7月25日に完成されており、驚愕するのは、傑作揃いの最後の三大交響曲がわずか1ヶ月半の間に書かれたという事です。「ジュピター」の名称はドイツの音楽家で興業師をしていたサロモンの命名だと伝えられています。「ジュピター」はローマ神話に登場する最高至上の神で、この交響曲はそれにふさわしい内容を持っています。堂々たる風格と壮麗な響き、詩的で温かな美しさ、そして最終楽章はフーガの技法が最大限に駆使された傑作の章で締めくくります。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 第2楽章 アンダンテ・カンタービレ
第3楽章 メヌエット、アレグレット 第4楽章 アレグロ・モルト

リヒャルト・シュトラウス：あすの朝（“4つの歌”作品27から第4曲）

リヒャルト・シュトラウス：愛の賛歌（“5つの歌”作品32から第3曲）

「あすの朝」は1894年、新婚の妻パウリーネに捧げられた歌曲集「4つの歌」の第4曲で、後に管弦楽伴奏に編曲され、シュトラウスの作品の中でも最もロマンティックな名曲として知られています。「そして明日 太陽はまた輝くぞう 僕が行く道で 再び僕たちは出会い幸せになる この太陽の輝きにみちた大地で…」というジョン・マッケイの詩によっています。「愛の賛歌」は1896年に書かれた「5つの歌」の第3曲で、これも妻のパウリーネに捧げられています。「栄えあれ 君の生まれたその日よ 栄えあれ 僕が君に初めて出会ったその日よ 君の瞳の輝きに我を忘れ 僕は立ち尽くすのだ 幸せな夢見る男として…」というカール・ヘンケルの詩による作品です。

リムスキー=コルサコフ：スペイン奇想曲作品34

ロシア5人組のひとりリムスキー=コルサコフは海軍士官でしたが、後に民族主義音楽の先頭に立ち、晩年は音楽院の院長として活躍し、多くの名作を残しました。スペイン奇想曲は創作の絶頂期を迎えていた1887年の夏に完成され、10月にペテルブルクで初演されました。ヴァイオリン・ソロが活躍しますが、最初は「スペインの主題によるヴァイオリンと管弦楽のための幻想曲」とスケッチしていました。1.アルボラーダ 2.変奏曲 3.アルボラーダ 4.セーナとジプシーの歌 5.アストリアのファンタンゴというスペイン各地の民謡や舞曲を主題にした5つの部分から出来ています。きらめく色彩と緻密なオーケストレーションが見事な名曲です。

メンデルスゾーン：交響曲第5番ニ長調作品107 “宗教改革”

この曲は1830年6月に行われるマルティン・ルターの宗教改革の300年記念式典のために委嘱され作曲されました。1829年9月から取りかかり1830年4月に完成しますが、記念式典は中止となり、楽譜をパリ音楽院管弦楽団の指揮者アブネックに送りますが演奏されず、結局初演は1832年11月にベルリンのジングアカデミーで自身の指揮によって行われました。メンデルスゾーンの死後1868年2回目の演奏がパリで行われ、この時初めて出版されたため、実際には2番目の交響曲ですが、第5番という番号が付けられています。2つのコラール（ルター派教会で歌われる賛美歌）が使われ宗教的素材を生かしていますが、リズムカルな第2楽章、短いながら美しい旋律がのびのびと歌われる第3楽章を挟んだ偉容にみちた両端楽章など多くの魅力を持った名曲です。

第1楽章 アンダンテ - アレグロ・コン・フォコ 第2楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ
第3楽章 アンダンテ 第4楽章 アンダンテ・コン・モート - アレグロ・ヴィヴァーチェ